ISSN 0386-4790



国文学研究資料館報
第45号
平成7年9月

# 日本百名山

森澤良水

前任地の金沢は多くの作家に縁の地である。香林坊と県庁の間の緑豊かな空間、ここは、旧制四高の跡地で、当時の赤レンガの建物が今は「石川近代文学館」となっている。ここには、室生犀星、泉鏡花、徳田秋声、井上靖、高橋治、五木寛之などの作家とともに、読み、歩き、書いた山岳作家の深田久弥の資料が展示されている。

彼は、福井県に近い石川県大聖寺の出身で、子供の頃から美しい白山の姿を見て育った。彼の名著「日本百名山」は日本の山家のバイブル的存在であり、私も愛読している。

私が山の素晴らしさを知ったのは、尾瀬の至仏山とか谷川岳に登った時に、高山の逞い松をはじめとする緑と岩のコントラスト、夏の暑い時期の天然のクーラー、透き通った清流を味わった時である。また、登る時は苦しいが登りきった時の爽快感は、なんとも言えない。

田舎に育った私はどんよりしたスモッグ、洗剤の泡やゴミの漂う川の流れに象徴される都会の生活になじめず、子供の頃の仁淀川の清流や山の緑、綺麗な空気を求めて山に入るようになった。

現在までに、北は北海道から南は屋久島に散在する日本百名山のうち七十一山を登ったが、ほとんどが単独行である。人は危ないと言うが、行き交う登山者も多く、夏山の通常コースを登っている限り、それ程危ないとは思わない。

北海道に大雪山という山があるが、これはその辺りの山の一群の総称で個別の山の名前としては、例えば「旭岳」である。また、立山も総称で、例えば「雄山」が、具体的山の名前である。こういった総称の山が、結構ある。

また、何をもって「山」と言うかもなかなか難しい。よく使われるものとして「○○山」、「○○岳」、「○○峰」というのもあるし、変わったところでは「○○嶺」「○○巓」というのもある。

また、あるピークを「○○の頭」という場合もある。何の名前もついていないピークも多い。どのピークが山でどのピークが山でないかを考え出すと頭が混乱してくる。また、山の中に入ると、似たようなピークだとどのピークが一番高いのかよくわからなくなる。

印象に残っている第一番の山は、やはり槍ガ岳である。この山を息子と登った蝶ガ岳から眺めた時、いつかこの山に登ってみたいと思った。

槍ガ岳は高さこそ日本で五番目であるが、奥山に聳えるその姿の美しさはなんともいえない。表銀座コースの合戦尾根から向うの尾根の緑の後ろにふいに見えた灰色の槍の穂先の優雅な姿に感動した。燕山荘から大天井岳へ向う尾根道は、基本的に横歩きで、楽である。当たり前であるが、とにかく山は登りが大変で一旦尾根に出てしまえば、散歩気分、頂上の後は下れば、いいだけである。

もっとも、これには、後で述べるように例外があるので、なかなか法則通りにはいかない。月面を思わせ、およそ生物は住めないと思われるこの尾根のガレ場にはコマクサというピンクの可憐な花が健気に風に抗して咲いていた。高山植物の花は一般的に小さく、控え目な存在であるが、その中で私が一番好きなのはこの花である。

## 目次

日本百名山……森澤良水……1
文庫紹介㉒……3
文献資料部事業報告……岡　雅彦……4
研究情報部事業報告……立川美彦……6
整理閲覧部事業報告……大西　廣……9
新収資料紹介㊹……11
利用者へのお知らせ……12
評議員・委員等名簿……13
彙報・講演会報告……16
人事異動……17
平成七年度秋季学会開催一覧……18

大天荘、喜作新道を通り、ヒュッテ西岳の所から大きく下り、この下る時は折角登って高度を稼いだのにと悔しくなる。同じ思いをしたのが、蝶ガ岳から常念岳に向う途中大きく下った時である。「吊り橋でもかかっていたらなあ」と文明が恋しくなる。再び、東鎌尾根を七百メートル程登るとやがて槍岳山荘に着く。ここから、頂上までは岩峰登り十五分程である。

一番多く登った山は、東京郊外の高尾山で、その次が尾瀬である。尾瀬は水芭蕉で有名であるが、私はこの花よりも七月に咲くニッコウキスゲの花の方が好きである。一面にこの花の咲く燧岳の麓の大江湿原は素晴らしい。また、尾瀬ガ原より尾瀬沼の方が好きである。

山で気になるのは何と言ってもお天気である。一応天気予報を見て出かけるが、それでも三分の一くらいはガスっている。一日のうちでも刻々と天気が変わる。早朝が一番安定しているので、早発ちに限る。山小屋は、四時か五時頃から出発する人の気配で騒がしくなる。

また、真夏には、午後入ると入道雲がわいてきて、雷が発生しやすくなるので午後一時頃、遅くとも二時頃までに次の山小屋に入っているのが望ましい。雷に会ったのは、尾瀬に家族で行った時に木道を皆で逃げたことや、八ガ岳下山後激しい雷雨があり、橋の下で雨宿りをし、やっと小雨になったので駅に向うと、今度は、中央線が不通になっていたという苦い経験もある。山の天気が一番安定するのは梅雨明け十日間ぐらいと一般に言われている。

荷物が増えるためテントを持ち歩かない私は、山小屋のお世話になっている。日本で三番目の高さの奥穂高岳に登った時には、奥穂高岳山荘にお世話になった。この山荘には、「太陽のロビー」と呼ばれる東西に作られた窓から朝日、夕日が眺められ、中央に薪ストーブを据え、木目を生かした素晴らしい談話室があり、そこで山岳ビデオや音楽を聞きながら至福の時を過ごした。

最近は文明が発達しており、三千メートル近いこの小屋や、富士山頂には、公衆電話があり、また、後者には郵便局や神社などもある。ご来光が上がり、下界に三角形の富士山の影を見た時は、感動ものであった。

山小屋が一番混むのは、お盆の頃でこの頃の山行はがまんした方がいい。畳、一畳に二～三人という事態もありうる。もっとも東北の山小屋は、そうでもなさそうだ。九月に入ると山はぐっと静かになるが、反面、この頃は交通の便も非常に悪くなり、秋雨前線や台風で天気も悪くなるという欠点もあり、なかなかうまくいかない。

山に登る楽しみの一つは下山後温泉に入ることである。ウルップソウなどお花畑の美しい白馬岳から下山途中、高度二千二百メートルにある鑓温泉に入りながら下界を眺めた時の心地好さは格別である。その後家族と白馬岳を再び訪れた時は、白馬八方温泉「第一郷の湯」で山行の疲れを癒した。

八甲田山に登った時入浴した「酸カ湯温泉」も強酸性のため目にしみるものの歴史を感じさせる木の風呂で、入っている人達がその血色の良さから皆非常に健康そうに見えた。また、穂高を望む「鏡平」から笠ガ岳を経て中尾温泉口の川べりに湧いている温泉に体を浸した。この露天風呂の底には小石が敷き詰められており、これが疲れた足の裏を揉みほぐしてくれた。ライトアップされた紅葉を眺めながら入れる温泉は格別であった。妙高山から下山後入った「河原の湯」は白骨温泉と同じような乳白色の湯でいかにも効きそうである。このように、山登りをする余禄としてこれまで多くの温泉に入ることができた。

山に入ると冷たい、おいしい、安全な水が飲め、またこれを御土産に持ち帰れることも有難いことである。立山の室堂に、日本名水百選の「玉殿の湧水」があるが、この水を水筒に詰め、登った剣岳の「カニの縦道」や「カニの横道」では岩に体をへばり付けながら、冷や冷やで通過した。仙人池からの裏剣の素晴らしい景色を眺めながら黒四ダムの下流にあたる「黒部下の廊下」に出た。ここを上流の、四方から谷川が交差する十字峡まで行き、阿曽原の山小屋に引き返した。黒四ダム建設のため絶壁に幅一メートル位くりぬかれた道はそれはスリリングであった。この旧日電歩道建設当時、ここから墜落した人夫だけでも数十人に

のぼるそうである。阿曽原小屋には露天風呂があり、黒部川を見ながら入れる。あまりの静寂に人恋しくなる。

この側に、トロッコ電車のトンネルがあるが、岩盤温度が最高一六六度に達したためダイナマイトの爆発事故などが起き、三百人以上の工事人夫の命が失われている。このことは、吉村昭の「高熱隧道」に生々しく描かれている。この外、山に関わる多くの文学作品があるが、私が訪れた所では、ナイロンザイル切断事件を扱い、穂高や上高地の徳沢小屋が舞台の井上靖の小説「氷壁」、また新田次郎の生徒の木曽駒ガ岳集団登山の遭難事件を扱った「聖職の碑」や槍ガ岳北鎌尾根で亡くなった単独行者加藤文太郎がモデルの「孤高の人」、未踏の岩峰・槍ガ岳初登攀に成功した修行僧播隆を描いた「槍ケ岳開山」などの小説がある。

高村光太郎の詩に歌われた安達太良山（阿多多羅山）。この山は古くは万葉集にも歌われているが、この外、磐梯山、筑波山、富士山なども万葉集に見られる。古今和歌集には白山などが歌われている。

登山では、突然動物に出くわすことも多い。木曽、空木岳登山の時のニホンカモシカ、黒部五郎岳の雷鳥のヒナ、丹沢山のシカ・ウサギ、戸隠、高妻山の猿、薬師岳の熊とのニアミスなど思わぬ楽しみと驚きがある。

古代ギリシャの医者ヒポクラテスは「歩くことが最良の薬である。」と言い、フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーは「告白」の中で「私の頭は、足と一緒にしか進まない。」と述べている。古来、散歩を愛した思想家は多く、人間の思考と歩くことの関係もまた興味深い。

私も、健康法の一つとして山に登っており、これからも体力の続く限り登り続けて行きたいと考えている。

なお、偶然ではあるが、深田久弥が昭和三十年から世田谷区松原に転居し、山の文献を集めた書庫兼書斎の「九山山房」で多くの作品を残したことから、今年の九月二日から十月八日の間「『日本百名山』の深田久弥と山の文学展」が世田谷文学館で開催されており、私もぜひ行ってみたいと思っている。

（管理部長）

## 文庫紹介㉒

# 百々御所文庫

「人形寺」の名で著名な京都の尼寺、臨済宗西山宝鏡寺は、京都市上京区寺之内通堀川東入百々町所在。百々御所文庫は同寺院内にある。

宝鏡寺開山は光厳天皇息女恵厳禅尼と伝えられ、中世には景愛寺派の比丘尼御所であった。

寛永二十一年（一六四四）、御水尾天皇の息女理昌尼王が入寺して以来、皇女の入寺が相次いだ。明和元年（一七六四）には御所号「百々御所」の勅許を賜わり、現在に至るまで高い格式を誇る。

名刹に相応しく、多数の古文書、典籍を所蔵する。戦前、同文書四百六十余点が京都大学へ、九点が京都国立博物館へ寄託された。昭和五十九年、京都府教育委員会文化財保護課が古文書緊急調査を行ない、中世文書を中心に調査目録を作成した（『尼門跡寺院大聖寺・宝鏡寺・霊鑑寺古文書目録』）。

国文学研究資料館も、御門跡沢田恵瑾氏の御高配の下、平成六年度から調査を開始した。特別調査員として西口順子氏（相愛大学教授）・岡佳子氏（現大手前女子大学専任講師）に御指導御協力を賜わることとなった。

当館の調査は、典籍類と古文書四百十余点の調査を終え、ようやく緒に着いたばかりである。国文学関係では、例えば、『宝物集』（近世中期写、写本一冊）、『北野天神縁起』（同）などが発見された。木箱七箱に及ぶ近世文書、近世前期から現代まで書き続けられている日記二百余冊はいずれも未調査のままである。近世尼門跡研究のみならず、国文学研究にも有益な史料であり、今後の詳しい調査が待たれる。

なお、昨年度の調査を担当した当館助教授小峯和明氏は、今春立教大学に転出、今年度は特別調査員として参加する。

中野真麻理

# 文献資料部事業報告

岡　雅彦

平成七年度の調査収集事業は、五月九日の収集計画委員会の議を経て、五月二十五日の調査員会議（総会）で具体的打合せを行ない、既に作業はかなり進捗している。その総会では、大隅和雄客員教授の講演「醍醐寺の古文書聖教とその調査について」があったほか、「奥書・識語をめぐる諸問題」のテーマでのシンポジウム（パネリスト　田中登帝塚山短期大学教授、牧野和夫実践女子大学文学部教授、武井和人埼玉大学教養部助教授、司会新藤協三教授）を行い、活発な議論が展開された。

当館の調査収集事業は調査員の方々の協力に支えられて着実に成果が上っており、現在までで調査二十二万点、収集十四万五千点に及んでいる。今後もこのペースを守って資料の蓄積に努めなければならないが、これらの資料を使っての共同研究が活発に行われるよう期待する。また、今まで調査収集対象を江戸末までとしていたが、今や明治以降もその対象とすべき状況にあると判断され、その情報の収集と方法の検討を開始した。

**平成六年度国文学文献資料調査・収集の概況**

一、調査

平成六年度は、本年三月末までに一一一箇所の所蔵資料八〇九一点を調査した。

**北海道・東北地区**（順不同、敬称略、一部省略。以下同じ）

北海学園大学附属図書館（北駕文庫）・市立函館図書館・伊達市開拓記念館・弘前市立図書館・岩手県立図書館・東北大学附属図書館（狩野文庫）・仙台市民図書館・仙台市博物館・仙岳院・酒田市立光丘文庫・福島県立図書館・初瀬川文庫。

**関東地区**

茨城県立歴史館・茨城大学附属図書館・筑波大学附属図書館・流通経済大学附属図書館（祭魚洞文庫）・小川町資料館・館林市立図書館（秋元文庫）・埼玉県立文書館・東京芸術大学附属図書館・東京芸術大学附属図書館（脇本文庫）・宮内庁書陵部・明治大学附属図書館（毛利文庫黒川本）・三井文庫・東京大学文学部国文学研究室・東洋文庫・東京都立中央図書館（東京誌料・特別買上文庫）・尊経閣文庫・神奈川県立金沢文庫・横浜開港資料館・大山阿夫利神社。

茨城大学附属図書館・館林市立図書館が新規。小川町資料館・大山阿夫利神社が予備調査。

**中部地区**

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・糸魚川市歴史民俗資料館・黒船館・黒川村立公民館・金沢大学附属図書館・福井市立図書館（松平文庫）・小浜市立図書館・山梨県立図書館・上田市立図書館（花月文庫）・柏屋別荘・小諸市立図書館・諏訪市図書館・磐田市立図書館・磐田市教育委員会・浜松市立賀茂真淵記念館・三島市郷土館勝俣文庫・名古屋大学附属図書館（岡谷文庫）・名古屋市蓬左文庫・名古屋市博物館・名古屋市鶴舞中央図書館・愛知県立大学附属図書館・中京大学図書館・大須文庫・西尾市岩瀬文庫・尾鷲市立中央公民館郷土室。

磐田市教育委員会は予備調査。

**近畿地区**

夢望庵文庫・京都府立総合資料館・京都国立博物館・京都大学附属図書館（平松家本）・京都大学文学部（穎原文庫）・立命館大学附属図書館（西園寺文庫）・陽明文庫・陽明文庫（特殊本）・蘆庵文庫・百々御所文庫・醍醐寺・奈良女子大学附属図書館・天理大学附属天理図書館・大和郡山市柳沢文庫・宝山寺・大阪女子大学附属図書館・温泉寺・青山会。

百々御所文庫・青山会は新規。京都国立博物館・醍醐寺・宝山寺は予備調査。

**中国・四国地区**

ノートルダム清心女子大学附属図書館・広島市立中央図書館・三原市立図書館・専徳寺・山口大学附属図書館（棲息堂文庫）・岩国徴古館・西円寺・萩市立図書館・萩市立郷土博物館・鎌田共済会図書館・総本山善通寺・大洲市立図書館・八幡浜市民図書館・徳島県立図書館（森文庫）・丈六寺・高知県立図書館（山内文庫）。

専徳寺・萩市立郷土博物館は予備調査。

**九州地区**

柳川古文書館・祐徳稲荷神社（中川文庫）・長崎大学附属図書館・長崎大学附属図書館経済学部分館・長崎県立長崎図書館・島原図書館（松平文庫）・松浦史料博物館・長崎県立対馬歴史民俗史料館・熊本市立

図書館・臼杵市立臼杵図書館・杵築市立図書館・佐伯市教育委員会・沖縄県立図書館・沖縄県立博物館・沖縄県立図書館宮古分館・琉球大学附属図書館。

沖縄県立図書館宮古分館は新規。琉球大学附属図書館は予備調査。

**海外**

ライデン大学・ライデン国立民族学博物館・新ルーバン大学人文科学系図書館・チェスタービーティー図書館。

右は海外科研費による調査。

二、収集

本年三月末までに左記の五二箇所の所蔵資料五九四二点を収集した。

**北海道・東北地区**

北海学園大学附属図書館（北駕文庫）・弘前市立図書館・岩手県立図書館・盛岡市中央公民館・東北大学附属図書館（狩野文庫）・仙台市民図書館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・初瀬川文庫。

岩手県立図書館は新規。

**関東地区**

茨城県立歴史館・早稲田大学附属図書館・東京芸術大学附属図書館（脇本文庫）・宮内庁書陵部・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東洋文庫・尊経閣文庫・池田三枝子・神奈川県立金沢文庫。

池田三枝子・神奈川県立金沢文庫は新規。

**中部地区**

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・富山県立図書館（中島文庫）・石川県立図書館（李花亭文庫）・金沢市立図書館（藤本文庫）・長野県短期大学附属図書館・上田市立図書館（花月文庫・花春文庫）・名古屋市鶴舞中央図書館・名古屋市蓬左文庫（尾崎コレクション）・愛知県立大学附属図書館・大須文庫・名古屋市博物館・新城ふるさと情報館（牧野文庫）・西尾市岩瀬文庫。

富山県立図書館は新規。

**近畿地区**

正教蔵文庫・夢望庵文庫・京都大学文学部（穎原文庫）・陽明文庫・蘆庵文庫・大和文華館・大阪女子大学附属図書館・白鹿記念酒造博物館・温泉寺・青山会。

青山会が新規。

**中国・四国地区**

ノートルダム清心女子大学附属図書館・三原市立図書館・岩国徴古館・鎌田共済会図書館・総本山善通寺。

**九州地区**

祐徳稲荷神社（中川文庫等）・熊本大学附属図書館（北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館・杵築市立図書館。

杵築市立図書館は新規。

**海外**

カリフォルニア大学バークレイ校。

**平成七年度調査収集計画**

本年度は、調査一二一箇所（海外を含む）九四七〇点、収集六八箇所（同）六〇九〇点を目標として、既に調査収集を進めている。そのうちには米沢市立米沢図書館、石野家を始めとする一三箇所の新規調査、仙台市博物館、仙岳院など一二箇所の新規収集が含まれている。

**海外資料の調査・収集**

本年度はベルリン州立図書館、ミュンヘン州立図書館の海外科研費による調査が予定され、カリフォルニア大学バークレー校、新ルーバン大学人文科学系図書館本の収集が予定されている。

**第四室**

本年度は客員教授として東京女子大学文学部大隅和雄教授が着任した。併任助教授は、前期は名古屋大学阿部泰郎助教授、後期は京都大学人文科学研究所金文京助教授。それぞれの専門分野から、文献資料部の書誌学的研究や特定研究に参加していただいている。

**その他**

調査員地区会議は、九州地区は福岡市で十一月二日（木）に、近畿地区は京都市で十一月七日（火）に開催を予定している。

特定研究の「古典籍学の確立、体系化のための研究」は五年度を終了し、成果の纒めに入っているが、本年度から新たに五年計画で「古典籍研究の新しい課題と研究方法の開発を目指す総合的研究」が始った。その内容は、一、絵巻・絵入本の総合絵引索引の開発を目指す研究、二、古典籍の輯佚と佚存書発見のための学際的研究、三、舶載書と日本文化に関する総合的研究、以上三つの課題を中心に進める。

本年度は人事異動があった。第二室小峯和明助教授が立教大学文学部教授として転出、後任として当部助手の樹下文隆が昇格、更にその後任として成城大学民俗学研究所から中野真麻理が着任した。

今年度から実施された文部省の「中核的研究機関支援プログラム」にもとづき、藤沢毅講師（非常勤）が着任、「幕末明治期図書の所在に関する基礎研究」プロジェクトを進めている。「調査研究報告」第十六号が三月三十一日付で刊行された。（文献資料部長）

# 研究情報部事業報告

立川美彦

**情報資料室**

第十八回国際日本文学研究集会を、十一月十日、十一日に開催した。参加者数は、昨年度より若干減少し、九二名（内、外国人約二九名）、レセプションへの参加者は四七名であった。

ここ五年間の参加者数の推移は、次のごとくである（カッコ内は外国人）。

平成二年　七一名（二二名）
三年　八〇名（三四名）
四年　一三九名（五九名）
五年　一二二名（三七名）
六年　九二名（二九名）

平成四年の第十六回集会は、当館設立二十周年を記念した、特別集会で、この時に増加した数が、当年度は、もとにもどったといえるかもしれない。

ただ、昨年度より減少したことは、気になるところで、外国人留学生などの興味を考え、次年度は古典芸能の実演などを交えてみることが、委員会において提案されている。

国際日本文学研究集会業務などに関連し、外国への出向を行った。八月に室長武井は、コペンハーゲンで開催されたヨーロッパ日本研究学会に参加、また年度末の二月から三か月間、ロンドン大学で研修を行い、英国日本学会にも参加して、国際学会の開催方法等の調査に成果をあげた。

ただ、当室は実質的な教官は室長一人という体制であるため、長期間、室が教官不在になるという問題点が生じた。今後の検討課題とせねばならない。

新聞情報掲載の国文学関係記事の収集は、例年どおり順調な進捗を見た。館報も例年どおり二回の発行を行った。

**情報分析室**

情報分析室の最大の業務である『国文学年鑑』平成五年版の編集を完了し、予定通り平成七年三月末に刊行することを得た。

平成五年版の概要はほぼ次の通りである。

◇雑誌・紀要・論文集所載論文件数　一二、五八二件
◇新聞所載論文目録　四九件
◇学会一覧　四一学会
◇学会研究発表一覧　六七五件
◇新指定文化財目録　二〇件
◇平成2年度文部省科学研究費等交付一覧　三二〇件
◇受賞一覧　六七件
◇訃報　三九件
◇単行本目録　二、三一六件
◇収載雑誌紀要一覧　一、一二九件
◇翻刻・複製一覧　一、一七四件
◇執筆者索引　八、四六七人

総ページ数は、雑誌紀要所載論文数が昨年より一、三〇〇件強大幅に増加したため、平成四年版より約五〇ページ増の八三五ページとなり、発行所による価格も一昨年一万円を越えて以来、三年連続の値上りとなっている。こうした年間論文数の増加にともなう諸問題を含め、年鑑作成にかかわる情報分析室の将来には、引続き次のような大きな二課題がある。

1　論文データの増大にともなう業務スケジュールの過密化とアルバイト人員確保の問題

2　年鑑横組み化移行の問題と国文学論文目録データベースとの関係の問題

2は当館の大型計算機システム更新の問題にからみ、ワークステーションレベルへのシステムの分散化を推し進める必要上、ワークステーション上で運用できる国文学論文目録データベース作成の新システムを構築する大きな課題が発生した。これにともない従来の国文学年鑑から国文学論文目録データベースへという業務の流れを根本的に変換し、逆にデータベースから国文学年鑑へという流れを検討する時期にさしかかったということを報告しておきたい。現在そのための様々な問題点を情報処理室・データベース室の協力を得て検討中である。

**データベース室**

旧来からのデータベース室の定常業務は、次のとおりである。

①国文学論文目録データベース新規一年分と遡及二年分をデータ追加し、オンラインで検索できるようにすること。

②データベースユーザの質問に応え、具体的に対応など助言する。

③国文学データベース研究集会報の発行

④国文学データベース研究集会の開催

①については、平成四年版（一一、三五一件）と昭和五二年版（五、五九三件）・昭和五三年版（五、六〇六件）を追加搭載した。

②については、相変わらず登録更新時の問い合わせが多く、特に図書館等では、申請者の異動に伴い、ＩＤが継続できなくなることは、ソフトの設定を変更する必要が生じるなど、不便が生じるので何とかならないかなどの注文も出ている。これは、実際に検索作業をする人は変わっていなくても、申請者名が変わると新規の申請になるため、ＩＤが変わってしまうという事情があるためである。その他、支払方法や検索の工夫の仕方など、問い合わせは多種に亘っている。

③については、平成五年秋に開催した第三回国文学データベース研究集会の講演内容と、第四回国文学データベース研究集会の案内を印刷して、第三号を発行した。これは、各国文学研究室や大学図書館等に発送した。

④は平成六年九月三〇日に第四回を開催した。その内容は歌集データベースを軸にしたものであったが、詳細は国文学データベース研究集会報第四号（平成七年七月発行）をご覧いただきたい。参加者は約一五〇名で、盛会であった。

既述の定常業務以外に、データベース室は、科学研究費の配分を受けるなどして次の二本のデータベース作製にも積極的に取り組んでいる。

①二十一代集データベース

②古典人名データベース

①は、本文データを主とする基礎データ群を作製終了し、これから各集の専門研究者による様々なデータの付加や、監修の作業に入っていく。平成六年度はその各担当者との第一回打合せを終了している。

②は平成三年度から継続して入力してきており、確実にデータを蓄積しているところで、これから、データの作製と並行して、データベースエンジンに搭載して、実用的な検索機能を開発していかなければならない。これは早ければ、平成九年度から、何らかの利用に供するべく、各種検討中である。

**情報処理室**

情報処理システムの運用・運転を除く平成六年度の事業は、以下のように実施した。

(1) サービスの向上

ホストコンピュータ及び周辺機器、館内ＬＡＮ及び分散システム、高機能イメージデータステーションなどの各種専用システムの導入と調整を行い、これらの運用を開始している。

ＯＣＲ、カラープリンタの利用度が上がり、そのため利用者の便宜のために端末室の改良を行った。

とくに、サービス向上のための延長運転の実証実験をやや長期に行い、その効果を確認した。とりわけ、利用者から高い評価を得、とくに今後は二四時間運転への要望が寄せられている。

(2) 業務システムの運用

マイクロ資料目録、研究論文目録、古典籍総合目録、本文のデータベースなどの運用機能拡充などを行い、平常通りの運転を実施した。また、資料管理、ＯＰＡＣ、文字セット管理システムなども平常に稼働している。

(3) 通信環境の整備

念願の館内ＬＡＮの予算が認められ、館内ＬＡＮを設置した。館外への通信環境の整備に向けて、いわゆるインターネットへの対応、ＷＷＷサーバの検討などを行った。

また、カラープリンタは館内ＬＡＮに接続し、プリンタサーバとして利用できるシステム開発を行い、運用を実施した。

(4) 新規システム開発

本文データベース、画像データベース、電子図書館システムなどの研究開発を行い、実験用システムを実現した。

マルチメディアデータベースの研究、及びダウンサイジングのための機能分散化検討などに、精力的に取り組み、成果をあげた。二十一代集を基本とする画像データベースとテキストデータベースの複合システムの研究開発に成功した。

また、将来の当館の資源の効率的活用と運用のためには、データの標準化が不可欠である。このため、目録型データ、本文型データについて、ＳＧＭＬ化を試み、成功した。いわゆる、ＤＴＤの定義により、国文学においてもＳＧＭＬ化が有効で、可能であることを証明した。国際会議においても、高い評価を受けた。

(5) 情報処理システムのリプレース

平成八年度に予定される情報処

理システムのリプレースに向け、政府調達のための各種準備を開始し、仕様検討などを行った。情報システム運用委員会において、リプレースの承認を得たので、次年度実行段階に入る準備を整えた。

(6) 国際接続

主に、科学研究費により、英国、仏国などから当館データベースへの日本語によるアクセスは、初めての経験でもあり、各国で大きな期待と評価を得た。引き続き、次年度も実験を行う予定である。

(7) 館外との協力

人文系共同利用機関情報システム連絡会に参加し、話題のマルチメディアやインターネットに関する各機関との情報交換を行った。

国文学研究とコンピュータシンポジウムは、第六回を開催した。新しい情報技術が国文学研究にどう役立つかについて、講演とシンポジウムを行った。約一五〇名の参加があった。

**研究開発室**

1　昨年度に引き続き、藤原銀男客員教授のもとで、「日英対応国文学研究語彙リスト」の作成方式の開発研究を行い、実資料に適用した。

〔基本検討〕館外から藤原譲筑波大学教授（用語研究）・石塚英弘図書館情報大学教授（言語処理）・後藤智範神奈川大学教授（情報処理システム）の協力を得て、数回にわたり企画検討の研究会議を行なった。その結果、昨年度のデータを大型コンピュータのハピネス方式管理からパーソナルコンピュータ基盤に変換する基本方針を確認し、実際の作業内容を一層改善して、データの書式変換作業を実施した。

〔作業内容〕実際の作業は、書式変換のソフトウェア作成、対象とする国文学研究語彙のID番号付与、品詞付与、振仮名付与であり、これは今後、作業様式の一般例として、他に応用可能である。研究開発面においてこの方式が特長とする所は、これを機械処理可能な英語辞書に連携させ、日英対応国文学研究語彙リストの作成を指向する点である。こうして、昨年度データ作成した小西甚一著『日本文芸史』（英文）の二、四〇〇の語彙について作業を行い、日英対応国文学研究語彙試験リストを得た。

研究の今後の展開の準備として、上記試験リストの語彙数の拡張と、英語辞書引きシステム、ハピネス基盤国文学研究資料館データアクセス方式の開発の検討を進めた。

2　六月二十四日付で徳島大学総合科学部の中川博夫助教授を併任助教授として迎えて、直ちに万葉集データベース（DB）開発の検討に入った。システムとしてはデータベース室で開発中の二十一代集DBと併用することで相互補完的効果が期待され、また、万葉集の複雑な情報をDB化するには未曾有の研究開発行為が必須であり、それは当室の本来的責務に適合すると考えて、これを推進することとした。十一月二十五日の準備会を経て、年度内二回の開発研究会議を行なった。

〔組織〕館長以下部内関係室長・室員、館外各分野専門家、国文学研究情報研究専門員。〔底本〕西本願寺本・寛永版本・広瀬本その他、有力伝本すべてのDB化を目指す。〔作業〕当面、西本願寺本の「標準態」（通行字体に統一し、正訓を尊重）および「原態」（底本の字体・傍訓を最大限に生かす）のうち前者を、会議メンバーである吉村誠氏作成のファイルを活用して二十一代集のシステムに転換したものを基礎データとして用い、校正・修正を行う。

以上の決定に従い、ワーキンググループが基礎データを作成し、校正・修正のための統一基準の原案を策定した。併行して室の資料・機器の整備を行い、特に、開発協力者の研究環境の高度化と将来におけるマルチメディアDB化を実現すべく、各伝本の電子映像化の試行段階として会議メンバーの池田三枝子氏所蔵寛永版本の検索機能付きモノクロCD化を発注・作成し、評価実験を行なった。

＊

平成六年度の研究情報部は以上五室の体制で運営されたが、次年度より新たに情報メディア室が設置されることになった。国文学研究にマルチメディアシステムを応用する道が、これによって組織的に開けるのである。国文学・情報工学双方からこの好機をとらえ、将来の電子化図書館の道へも繋げて行きたい。

（研究情報部長）

# 整理閲覧部事業報告

大西　廣

平成六年度の当部の業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は、次のとおりであった。

人事異動では、七月一日付で私・大西廣が、整理閲覧部長（教授、米国・メトロポリタン美術館から）の任に着いた。また、三月三十一日付で佐伯真一参考室長（助教授、青山学院大学文学部助教授に）が転出し、後任にロバート・キャンベル助教授（九州大学文学部講師から）が着任した。

（一）情報サービス室

(1)資料の受入

資料受入数は、マイクロ資料（ロールフィルム八九五リール、マイクロフィッシュ五、七九八枚、紙焼写真本一、〇〇八冊）、図書（一、三二〇冊）、逐次刊行物（四、三六一巻号冊）、雑誌製本（一九二冊）であった。その結果、平成六年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

そのほか、杉浦俊介氏から、「杉浦梅潭文庫」約一、二〇〇点を御寄贈いただいた。平成七年度、これらの資料を使って特別展示「杉浦梅潭と幕末・明治の漢詩人たち」と同じテーマによる公開講演会を開催した。

(2)マイクロ資料の整理

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九四年』を刊行した。収録書目数は、六、〇四九点（二二文庫）である。これにより、累積書目数は一四三、九一七点に達した。

(3)図書資料の整理等

一、九七三冊の図書（和古書を含む）を整理するとともに、学術情報センター目録システムを利用しての活字本・影印本の遡及入力作業を継続し、六、〇〇八冊を入力した。また、一四八個の帙作成を行うとともに貴重書四点の補修を行った。

(4)古典作品典拠ファイル作成事業

著作データ約八、四〇〇件のパンチ・校正を行った。

読みの付与、著者コントロール作業等を継続し、約四五、五〇〇件のデータを作成した。累計で約三五〇、五〇〇件となった。

(5)古典籍総合目録作成事業

データ作成では、データソース（所蔵目録）からデータシートへの転記作業を約一一、四〇〇件行い、これまで累積した転記済みデータの中から約一四、一〇〇件を点検し、パンチした。同時に、典拠コントロール作業を行い、約一四、三〇〇件の書誌データのコントロールを完了した。

また、作成の対象となるデータソースの調査を進めた。

(6)閲覧業務

年間開室日数は、二二五日、来館利用者数は、八、九七八人（一日平均四〇人）、新規登録者は、一、九七八人（一日平均九人）で、登録者の累計は、三二、八二三人に達した。閉架資料の閲覧点数は、二、二一七点（一日平均九九点）であった。また、文献複写は、二九、一六三件（一日平均一三〇件）で、電子複写（含むリーダープリンター）二四四、五四一枚、紙焼写真一五、一四五枚、ポジフィルム二、〇二二コマを作製した。

また、相互利用（郵送による文献複写・貸出）の複写受付は、二、二一九件で、大学図書館等への資料の貸出は、二八件九五冊であった。

なお、例年どおり、四月末から五月初めにかけて資料のくん蒸、三月末には蔵書点検を実施した。

(7)資料の保存

当館所蔵原本（写本・版本）のマイクロ化事業は、約三万コマ、一八五点の撮影を実施した。

保存用ネガフィルムの外部保管委託は、平成四年度収集分一、五〇八リールと一六ミリフィルム六〇四リールを追加委託し、総計二三、五〇四リールとなった。

（二）参考室

初めての試みとして、春季に「万葉集―広瀬本・近衛家本など―」と題する春季特別展示を実施した。

これには一昨年末、非仙覚本系統の完本の出現として新聞等で大きく報道され話題となった広瀬本万葉集（広瀬捨三氏蔵）をはじめ、近衛家伝来の未公刊資料の古活字本万葉集（陽明文庫蔵）、書入版本万葉集（石井庄司氏蔵）など、館外の資料を拝借して、館蔵貴重書等とともに展示を開催した。

当館としては、このような貴重な資料を館外から借り受けての展

示は初めてのことであった。

なお、特別展示に合わせて、この期間中に、第40回公開講演会を開催した（次項参照）。

(1)参考業務

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と二階閲覧室の参考開架図書の維持・管理にあたった。

(2)公開講演会

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会を開催した。

・第40回（4月15日、22日、於当館）

「広瀬本万葉集について」木下正俊（関西大学教授）、「人麿の信仰と影供」佐々木孝浩（当館助手）、「万葉集と湫石」佐竹昭廣（当館館長）

・第41回（10月21日、仙台市博物館）

「平安後期の和歌観念」錦仁（秋田大学教授）、「狩野文庫—江戸文化の雛形—」石田義光（東北大学附属図書館専門員）

・第17回夏期公開講演会「幕末から明治へ」（7月28～29日、於当館）

28日「幕末・明治の「絵」と「言葉」」大西廣（当館教授）、「幕末維新期、庶民の識字力の展開—寺子屋・郷学・学制発布—」森安彦（当館教授）

29日「明治初期の歴史叙述」谷川恵一（高知大学助教授）、「幕末・明治文学一斑—漢語的なるものを中心として—」小島憲之（大阪市立大学名誉教授）

(3)展示

特別展示、常設展示は、次のとおりであった。

○特別展示

・春季特別展「万葉集—広瀬本・近衛家本など—」（4月11日～27日）

○常設展示

・第58回「和書のさまざま」（5月16日～8月26日）

・第59回「江戸から明治へ」（9月12日～12月22日）

・第60回「古典文学の注釈書」（1月17日～4月21日）

（整理閲覧部長）

別表

所蔵資料統計

（平成7年3月末現在）

| 資料種別 | | 点数 | 冊（リール）数 |
|---|---|---|---|
| マイクロ資料 | マイクロフィルム | 120,585点 | 26,711リール |
| | マイクロフィッシュ | 12,355点 | 43,596枚 |
| | 紙焼写真本 | | 59,074冊 |
| 図書（古書及び新刊書） | | 33,207点 | 90,740冊 |
| 逐次刊行物 | | 3,672誌 | 120,144巻号冊 |
| 寄託図書 | | 964点 | 4,313冊 |

## 集会・講演会のお知らせ①

### シンポジウム「コンピュータ国文学」

例年開催してきた「国文学とコンピュータシンポジウム」と「国文学データベース研究集会」を、今年から合併し、表記の名の集会として、新たに開催することになりました。

本年は十月六日（金）午前十時より当館において開かれます。講演の内容は次のとおりです。ふるって御参加ください。

①万葉集データベースについて　中川博夫

②国文学共同研究とデータベース—『冥報記』の場合—　相田満

③和歌研究とコンピュータ—『好忠集』をめぐって—　フィリップ・ハリーズ

④歴博LANとインターネットの現状　鈴木卓治

⑤日本史史料データベースの構築　永村眞

⑥記録類全文データベース　照井武彦

⑦シンポジウム　司会　伊藤鉄也・原正一郎

# 新収資料紹介㊵

## 源氏大鏡　江戸初期写　三帖

源氏物語の梗概書。作者不詳。南北朝時代の成立かとされる。

六百番歌合において、藤原俊成をして「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」と言わしめた源氏物語は、はやく鎌倉時代において、中世の歌人・連歌師たちの必読の書であった。とは言え、あの尨大な作品を詠作の手本とするには、量的にも質的にもその用を成し難く、手軽に、そして源氏物語全体のおよその筋書を把握し、なかんずく和歌が詠まれた場面、状況などが一目出来る実用的な指南書の類は大いに活用されたものと思われる。梗概書は、こうした中世の源氏物語享受のあり方の中から生まれた教養書、手引書として流布した作品群であり、源氏大鏡もその一つである。

源氏大鏡の作品としての意味付け及び諸本本文整理については、稲賀敬二氏の研究によるところが大きく、氏の分類によると、資料館蔵の本文は、一類本の一本である。原本は上・中・下の三帖、紺地の表紙は金泥、金砂子で雲霞に遠山と松樹ほか、雲霞に秋草、雲霞に干網と舟などの模様入り、見返しは押銀箔、縦二十五cm横十八cmの綴葉装で保存状態が非常に良い。各冊の遊紙に「寫字臺之藏書」（西本願寺）「紅梅文庫」（前田善子）、各冊本文末に「寶玲文庫」の蔵印があり、吉田幸一博士旧蔵本である。料紙は鳥の子、題簽中央に大鑑（上・下）大かゝみ（中）とあり、内題には「光源氏一ふの哥ならひにこと葉」と書かれている。上の冊墨付一〇八丁、中の冊一二九丁、下の冊一一〇丁、一面一行二十五字前後十行書きで、各冊の書体は良く似ているが、多筆かとも思える。上の冊には、序と桐つほ～花ちるさと、中の冊には、すま～ふちのうら葉、下の冊には、わかなの上～ゆめのうきはしまでの梗概が記されており、巻冊の分け方は、一類本の大部分がそうである基本型A（田坂憲二氏）である。一類本諸本中もっとも古態を存する伝本は、松浦史料博物館蔵本と石田穣二氏架蔵本といわれており、古典文庫に石田氏架蔵本が翻刻されている（分冊のあり方は変型B）。古典文庫本文と比べて資料館本は、和歌、引歌は一字下げ、詠者名も本文から数文字空けで本文末尾に揃えるなど書式が整形されてきている。本文についても、古典文庫本での傍注・割注・語注が、資料館本では、本文としてそのまま続けて書かれている箇所が多く、傍注、歌注の量についても中の冊以降かなり多くなされている。巻名に続く年立についても「八かけろふ　かほる　廿六秋までの事此まきのことはにもうたにも見えたりかけろふはとんほふの事也又ぶようともいへりくさのなにもありはるのきのいりてちり〳〵とするかけをもいへり」のように、年立以上の補注の態度がある。古態を伝える本文に比して、資料館本は増補歌注本といえるもので、他の諸本に見られる誤写、誤脱箇所の訂正補充となるものである。又、源氏大鏡の諸本本文は、相互に誤脱、増補の関係がある作品であり、資料館本についても諸本同様に、誤写、脱語、脱文、混入文の箇所がある。これまでに、調査されている諸本は、数十本あり、そのうち資料館でマイクロフィルム、影印本などで収集されているものは二十一本（一類本は十一本）ある。石田氏が、松浦本・架蔵本の対極に位置付けされた資料館本（吉田幸一博士旧蔵本）は、諸本の本文校合に加えて資する一本であろう。

諸本の関係、各類本の相互の関係が明らかになされることは、源氏大鏡の梗概化の態度を知ることでもあり、中世以降多種多様なそして多量に作成されたであろう源氏物語梗概書のあり方の一面が窺い知れる。そして梗概化された本文の中に、ある作者像を見ることができれば、手引書としての役割に加えて文学作品としての意味を見つけたい。

（整理閲覧部　土田節子）

# 利用者へのお知らせ

**◆刈谷市中央図書館（村上文庫）のサービス区分変更について**

これまでマイクロ資料の閲覧だけが許可されていた刈谷市中央図書館（村上文庫）の資料が、複写可能となりました。サービス区分はAです。したがって、ポジフィルム、紙焼写真、電子複写（リーダープリンターによる複写）のいずれも可能です。

なお、複写物の再複製は禁じられています。出版物への掲載等の目的に再利用する場合は、刈谷市中央図書館の許可が必要です。

**◆新指定の貴重書、特別コレクション**

本年三月、次のとおり新たに貴重書二点と、特別コレクション一文庫が加わりました。これにより貴重書は全部で八十二点、特別コレクションは四コレクションとなりました。

〈貴重書〉

・金春禅竹自筆伝書
　五音之次第（写一冊）
　五音三曲集（写一冊）
　六輪一露之記（写一冊）
　［館報44号に紹介記事あり］
・表白御草（写一軸）
　［館報44号に紹介記事あり］

〈特別コレクション〉

・杉浦梅潭文庫
　［館報44号に紹介記事あり］

**◆来館利用者への注意事項及びお願い**

〈閲覧室入室の際〉

・鞄、荷物、袋物等はロッカーに入れてからご利用ください。
・ご持参の図書等を閲覧室で使用する場合は、その資料を受付に提示してください。「図書持込票」をお渡しします。
・携帯用複写機等の持ち込みは、禁止です。
・入室の際は、受付に「資料利用カード」を提出してください。初めての方は、登録手続きが必要です。
・入室は利用者本人に限ります。同伴者の入室はご遠慮ください。特別に付き添いを必要とされる方は、お申し出ください。

〈資料利用の際〉

・所蔵資料の閲覧室外への持ち出しは、お断りします。
・写本、版本等を閲覧する場合は、鉛筆以外の筆記用具の使用は禁止します。その他、「和古書取扱注意事項」に記載されている事柄を守ってください。
・当館及び原資料所蔵者に無断で、複写物を再複製、刊行したり、翻刻掲載に使用することは、固くお断りします。

〈閲覧室内で〉

・閲覧室内は、もちろん禁煙です。また、閲覧室内への飲食物の持ち込み、及び飲食は禁止します。喫煙、飲食は指定した場所でお願いします。
・他の利用者に迷惑がかかる行為は、ご遠慮願います。
・職員の指示に従わない場合は、入室をお断りいたします。

〈退室の際〉

・お帰りになる時は、必ず受付にお申し出ください。

**◆利用案内**

**利用資格**
学校の教員及び調査研究機関の研究員、大学及び大学院の学生、その他（館長が適当と認める者）

**閲覧時間**
九時～十七時

**資料請求受付時間**
九時半～十二時、十三時～十六時半

**文献複写受付時間**
九時半～十五時半

**休室日**
日曜日、土曜日、祝日、振替休日、毎月末日（日、土の場合は直前の金曜日）、四月末～五月上旬五日間、十二月二十七日～一月五日、三月二十五日～三月三十一日、その他

**来館できない場合の利用方法**
大学図書館等を通じて申し込めば文献複写及び貸出（資料は限定されます）ができます。また、個人が郵送で文献複写の申し込みをすることができます。詳細は情報サービス係にお問い合わせください。

## 評議員

任期　平成6年7月1日～平成8年6月30日

秋山　虔　駒沢女子大学人文学部教授、東京大学名誉教授
網野善彦　神奈川大学経済学部教授
石井　進　国立歴史民俗博物館長、東京大学名誉教授
稲賀敬二　安田女子大学文学部教授、広島大学名誉教授
猪瀬　博　学術情報センター所長、東京大学名誉教授
河合隼雄　国際日本文化研究センター所長、京都大学名誉教授
京極純一　東京大学名誉教授
久保田　淳　白百合女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
小玉正任　国立公文書館顧問
小林清治　東北学院大学文学部教授、福島大学名誉教授
佐野文一郎　東京国立博物館長
堤　精二　放送大学教授・四天王寺図書館長、甚の水女子大学名誉教授
濱田啓介　花園大学文学部教授、京都大学名誉教授
秀村選三　久留米大学比較文化研究所客員教授、九州大学名誉教授
尾藤正英　川村学園女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
平岡敏夫　群馬県立女子大学長
藤澤令夫　京都国立博物館長、京都大学名誉教授
水谷　修　国立国語研究所長
水谷静夫　(財)計盛計画研究所理事
吉川弘之　東京大学長
竹内美智子　共立女子短期大学教授
杤尾　武　成城大学文芸学部教授
延廣眞治　東京大学教養学部教授
野山嘉正　東京大学大学院人文社会系研究科教授
日野龍夫　京都大学文学部教授
吉原健一郎　成城大学文芸学部教授

## 共同研究委員会委員

任期　平成7年4月1日～平成9年3月31日

稲賀敬二　安田女子大学文学部教授
小笠原恭子　武蔵大学人文学部教授
中野三敏　九州大学文学部教授
野村精一　実践女子大学文学部教授
松浦友久　早稲田大学文学部教授
松尾葦江　相山女学園大学人間関係学部教授

## 国文学文献資料収集計画委員会委員

任期　平成6年4月1日～平成8年3月31日

池上洵一　神戸大学文学部教授
糸井通浩　龍谷大学文学部教授
多治比郁夫　大阪府立中之島図書館嘱託
横山邦治　広島文教女子大学長
名和　修　(財)陽明文庫文庫長

任期　平成7年4月1日～平成9年3月31日

黒田日出男　東京大学史料編さん所特殊史料部教授
杉谷寿郎　日本大学文理学部教授
田口和夫　文教大学文学部教授
中野幸一　早稲田大学教育学部教授
水田紀久　金蘭短期大学教授

## 国際日本文学研究集会委員会委員

任期　平成6年7月1日～平成8年3月31日

今西裕一郎　九州大学文学部助教授
谷川恵一　高知大学人文学部助教授
平岡敏夫　群馬県立女子大学長
松平　進　甲南女子大学文学部教授

## 文献目録委員会委員

任期　平成6年4月1日～平成8年3月31日

池内輝雄　筑波大学文芸・言語学系教授
揖斐　高　成蹊大学文学部教授
遠藤　宏　成蹊大学文学部教授
菊地　仁　山形大学人文学部教授
後藤祥子　日本女子大学文学部教授
小町谷照彦　東京学芸大学教育学部教授
鈴木日出男　東京大学文学部教授
瀬戸　仁　中央学院大学法学部教授
滝藤満義　千葉大学文学部教授
野山嘉正　東京大学大学院人文社会系研究科教授
原　道生　明治大学文学部教授
安田尚道　青山学院大学文学部教授

## 情報システム委員会委員

任期　平成6年8月1日～平成8年3月31日

石塚英弘　図書館情報大学図書館情報学部教授
稲岡耕二　上智大学文学部教授
井上　如　学術情報センター教授
白石悌三　福岡大学人文学部教授
杉田繁治　国立民族学博物館第5研究部教授
照井武彦　国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授

## 運営協議員

任期　平成6年8月1日～平成8年7月31日

〔館外〕

朝尾直弘　京都橘女子大学文学部教授
有吉　保　日本大学文理学部教授
伊藤正義　神戸女子大学文学部教授、大阪市立大学名誉教授
大口勇次郎　お茶の水女子大学文教育学部教授

中山雅哉　東京大学大型計算機センター助教授
長崎健　中央大学文学部教授
永村眞　日本女子大学文学部教授
星野聡　(財)計量計画研究所理事
水谷静夫　名古屋大学文学部教授
村上學　国立国会図書館総務部情報処理課長
村上正志

## 古典籍総合目録委員会委員

任期　平成7年4月1日～平成9年3月31日

加美宏　同志社大学文学部教授
小室明　国立国会図書館図書部古典籍課長
近藤禧禔男　東京大学附属図書館事務部長
柴田光彦　跡見学園女子大学文学部教授
堤精二　放送大学教授
益田宗　国立歴史民俗博物館歴史研究部教授

## 国文学文献資料調査員

任期　平成7年4月1日～平成8年3月31日

〔北海道・東北〕

家井美千子　岩手大学人文社会科学部助教授
加藤幸一　奥羽大学文学部助教授
佐藤晃　山形女子短期大学助教授
田中初恵　いわき明星大学人文学部助手
永田信也　北海道教育大学教育学部旭川校助教授
仁平道明　東北大学文学部教授
原田貞義　東北大学大学院国際文化研究科教授
播摩光寿　聖学院短期大学教授
宮澤照恵　北星学園大学経済学部助教授
山本陽史　山形大学教養部助教授

〔関東〕

稲垣泰一　筑波大学文芸・言語学系教授
落合博志　法政大学第二教養部助教授
小野尚志　帝京大学文学部助教授
兼築信行　早稲田大学第二文学部講師
鹿倉秀典　関東短期大学助教授
鈴木健一　茨城大学人文学部助教授
高橋啓之　日本大学文理学部助手
竹下義人　日本大学文理学部講師
藤田洋治　東京成徳短期大学助教授
湯浅佳子　二松学舎大学東洋学研究所助手

〔中部〕

石坂妙子　新潟大学教育学部助教授
伊藤伸江　愛知県立女子短期大学助教授
大島信生　皇学館大学文学部講師
大谷俊太　南山大学文学部助教授
加藤洋介　愛知県立女子短期大学助教授
神作研一　金城学院大学文学部講師
下西善三郎　上越教育大学学校教育学部助教授
鈴木孝庸　新潟大学人文学部教授
高橋明彦　金沢美術工芸大学美術工芸学部講師
高橋清隆　静岡英和女学院短期大学助教授
西山秀人　上田女子短期大学講師
服部直子　愛知教育大学非常勤講師
舩城俊太郎　新潟大学人文学部教授
安田文吉　南山大学文学部教授
椙沢昌紀　中京大学文学部講師
桝澤良一　金沢学院大学文学部教授
山本一　金沢大学教育学部助教授
綿抜豊昭　富山女子短期大学助教授

〔近畿〕

赤間亮　立命館大学文学部助教授
塩崎俊彦　神戸山手女子短期大学助教授
千葉真也　相愛大学人文学部助教授
中前正志　京都女子大学文学部助教授
藤原英城　京都府立大学文学部講師
三村晃功　光華女子大学文学部教授

〔中国・四国〕

會田実　四国大学短期大学部助教授
蘆田耕一　島根大学法文学部教授
石川一　広島女子大学国際文化学部教授
島田大助　山陽女子短期大学非常勤講師
杉本好伸　安田女子大学文学部助教授
妹尾好信　広島大学文学部助教授
田中則雄　島根大学法文学部講師
松原秀明　金刀比羅宮図書館嘱託
吉山裕樹　比治山大学現代文化学部助教授
余田充　四国大学短期大学部教授

〔九州〕

赤塚睦男　筑紫女学園短期大学助教授
池宮正治　琉球大学法文学部教授
井上敏幸　福岡女子大学文学部教授
高橋昌彦　純真女子短期大学助教授
中本環　熊本大学教育学部教授
西田耕三　熊本大学教養部教授
野中哲照　鹿児島短期大学助教授
安永美恵　筑紫女学園短期大学助教授
山田洋嗣　福岡大学人文学部教授

## 国文学研究情報研究専門員

任期　平成7年4月1日～平成8年3月31日

安藤　宏　上智大学文学部助教授
小川靖彦　和光大学人文学部講師
鈴木　豊　文京女子短期大学助教授
辻　勝美　日本大学文理学部助教授
寺井正憲　千葉大学教育学部講師
前田雅之　東京女学館短期大学助教授
宮崎修多　成城大学文芸学部助教授
内田保廣　共立女子大学文芸学部教授
小池一行　宮内庁書陵部首席研究官
竹本幹夫　早稲田大学文学部教授
中野　猛　都留文科大学文学部教授
深澤真二　和光大学人文学部講師
山口明穂　東京大学文学部教授
田口英爾　伝記作家
下田寿美子　成城大学大学院文学研究科博士課程

課題名「源氏物語の梗概書類の研究」

渡辺久寿　山梨英和短期大学教授
稲賀敬二　安田女子大学文学部教授
倉田　実　大妻女子大学短期大学部助教授

課題名「万葉一葉抄の総合的研究」

岩下武彦　中央大学文学部教授
石神秀美　鶴見大学文学部非常勤講師
小川靖彦　和光大学人文学部講師
杉田昌彦　東京大学大学院人文科学研究科博士課程
鈴木宏子　千葉大学教育学部講師
千艘秋男　東洋大学文学部助教授
深澤真二　和光大学人文学部講師

## 共同研究員

任期　平成7年4月1日～平成8年3月31日

課題名「論義法会の綜合的研究」

永村　眞　日本女子大学文学部教授
海老名　尚　学習院大学文学部非常勤講師
梯　信暁　大谷女子大学文学部講師
小峯和明　立教大学文学部教授
曽根原　理　東北大学文学部助手
高山有紀　新島学園女子短期大学講師
林　文子　東京女子大学文理学部助手
松尾恒一　神奈川県立翠嵐高等学校教諭
袁輪顕昱　(財)東方研究会専任研究員

課題名「杉浦海運関係資料に関する基礎的研究」

宮崎修多　成城大学文芸学部助教授

## 自己点検・評価委員会委員

任期　平成7年4月1日～平成9年3月31日

有吉　保　日本大学文理学部教授
野山嘉正　東京大学大学院人文社会系研究科教授
吉原健一郎　成城大学文芸学部教授

## 集会・講演会のお知らせ②

### 第19回国際日本文学研究集会

日時　平成7年11月9日（木）・10日（金）
会場　国文学研究資料館　一階大会議室
申込　当日受付可。参加費一〇〇〇円。
　レセプション参加の方は三〇〇〇円を追加。
　口演・公開講演のみ参加の方は無料。

十一月九日（木）
研究発表（一時二〇分～）
○安居流唱導における国文学と美術史の連絡
　～普賢菩薩・十羅刹女像を中心として～　マイケル・ジャメンツ
○「今昔物語」構想に対する一試論
　～三国構想における三韓関係説話の捉え方を中心に～　李瑛雅
○文学と演劇の「引用」の差異について
　～本歌取り・本説・素材をめぐる一考察～　ボナヴェントゥーラ・ルペルティ
○新ロマン主義文学の再検討
　～明治34年～大正4年を中心として～　米山禎一
○福永武彦『秋の喚き』論　王成
○安部公房の小説における〈変身〉のモチーフをめぐって　～初期作品を中心として～　李貞熙
レセプション（五時三〇分～）

十一月十日（金）
研究発表（十時三〇分～）
○浄瑠璃とパンソリ作品の感情を摸写した擬音語・擬態語　～人物の泣くさまを中心に～　愈三善
○古浄瑠璃『しのだづま』の新趣向　加賀佳子
○地方諸藩に見る能役者の活動　～萩藩・岩国藩の江戸初期演能記録を中心に～　樹下文隆
口演（一時十五分～）
○『女唄「葛の葉の子別れ」』　竹下玲子
公開講演（二時十分～）
○上方役者絵の特色　松平進
○享保期の近松時代物　アンドリュー・ガーストル

# 彙報

**委員会日誌**

平成7年

5月9日　国文学文献資料収集計画委員会(第一回)

5月25日　国文学文献資料調査員会議総会

7月18日　文献目録委員会

7月19日　共同研究委員会（第一回）

8月4日　国際日本文学研究集会委員会（第一回）

**運営協議員会の開催について**

本年度第一回運営協議員会が平成七年六月十九日（月）に開催され、議事は、管理運営の概況、平成六年度事業報告及び平成八年度概算要求について協議が行われた。

**評議員会の開催について**

本年度第一回評議員会が平成七年七月十二日（水）に開催され、議事は、管理運営の概況、平成六年度事業報告及び平成八年度概算要求について評議が行われた。

**外国出張**

原　正一郎

相田　満

渡航先　アメリカ合衆国

目　的　国文学データベースの学術情報網による国際共同利用に関する研究のため

期　間　平成7年7月10日～平成7年7月24日

武井　協三

渡航先　連合王国

目　的　国文学データベースの学術情報網による国際共同利用に関する研究のため

期　間　平成7年8月25日～平成7年9月3日

大西　廣

渡航先　オーストリア

目　的　第6回日本資料専門家欧州協会会議出席

期　間　平成7年9月26日～平成7年10月2日

**海外研修**

ロバート・キャンベル

渡航先　アメリカ合衆国

目　的　「セクシャリティと江戸文化」に出席(発表)するために

期　間　平成7年8月16日～平成7年8月25日

**国文学研究資料館永年勤続者表彰**

国文学研究資料館永年勤続者表彰規定に基づき、次の方に表彰状を授与し、記念品として銀杯を贈呈した。

○平成7年5月1日

添田　勉（会計課経理係長）

# 講演会報告

**品川歴史館・国文学研究資料館共催「特別展記念連続講演会」**

今年は例年の夏期講演会に代って、品川区と連携した形で特別展示と講演会を初めて試みた。地元品川区の品川歴史館（大井六―十一―一）開館十周年を記念して、「商売繁盛」と銘打ち、歴史史料と文芸作品にみる近世の町人群像を浮かび上がらせる内容となった。講演会は、毎週の土曜日（七月八日、十五日、二十二日、二十九日）計四回行われた。いずれも「繁盛」の二文字にふさわしく、満員御礼の盛行ぶりとなった。講師は、出版、文芸、貨幣など、種々の表象文化に焦点をあて、近世町人の具体像に迫ろうとするところに共通の視線があった。この企画を機に、今後も地域との協力を深め、さまざまな事業を実現させてゆきたい。

講師と講演は、左記の通りである。

八日

・今田洋三近畿大学教授「本屋商売」

十五日

・ロバート・キャンベル当館助教授（整理閲覧部参考室長）「書画会と江戸文学」

二十二日

・林玲子江戸東京博物館研究員「歴史からみる江戸の商人像」

二十九日

・岡雅彦当館教授（文献資料部長）「江戸小咄と商人」

## 集会・講演会のお知らせ③

### 第四十三回公開講演会

東京以外の都市で行うことが毎年の恒例となっている秋期の公開講演会を、本年度は、十月二十一日（土曜）午後、高知市において開催する。会場は高知会館。講師と講演は、左記の通りである。

・佐竹昭廣当館館長「『高知見聞録』抄」

・谷川恵一高知大学人文学部助教授「宮崎夢柳と『鬼啾啾（しゅうしゅう）』」

・渡邉輝道高知大学人文学部教授「紀貫之と『土佐日記』」

# 人事異動（平成7年3月～平成7年8月）

## 【教官】

| 発令年月日 | 氏名 | 異動内容（新官職） | 旧（現）官職等 |
|---|---|---|---|
| | | （辞職） | |
| 7．3．31 | 小峯和明 | 辞職（立教大学文学部教授へ） | 文献資料部助教授 |
| 〃 | 佐伯眞一 | 〃（青山学院大学文学部助教授へ） | 整理閲覧部助教授 |
| 〃 | 小川靖彦 | 〃（和光大学人文学部講師へ） | 研究情報部助手 |
| | | （昇任） | |
| 7．4．1 | 樹下文隆 | 文献資料部助教授 | 文献資料部助手 |
| 〃 | ロバート・ブライアン | 整理閲覧部助教授 | 九州大学文学部講師 |
| | | （転任） | |
| 7．4．1 | 入口敦志 | 研究情報部助手 | 九州大学文学部助手 |
| | | （採用） | |
| 7．4．1 | 中野真麻理 | 文献資料部助手 | |
| 〃 | 大隅和雄 | 文献資料部客員教授（8.3.31まで） | 東京女子大学文理学部教授 |
| 〃 | 藤原鎮男 | 研究情報部客員教授（8.3.31まで） | |
| 〃 | 馬淵久夫 | 史料館客員教授（8.3.31まで） | 作陽短期大学教授、同短期大学部長 |
| 7．5．1 | 藤澤穀 | 文献資料部非常勤研究員（8.3.31まで） | |
| 〃 | 杉田まゆ子 | 研究情報部非常勤研究員（8.3.31まで） | |
| 〃 | 森本祥子 | 史料館非常勤研究員（8.3.31まで） | |
| 7．7．1 | 丸山勝巳 | 研究情報部教授 | |
| | | （併任） | |
| 7．4．1 | 樹下文隆 | 文献資料部第二文献資料室長 | 文献資料部助教授 |
| 〃 | 立川美彦 | 研究情報部情報メディア室長 | 研究情報部教授 |
| 〃 | ロバート・ブライアン | 整理閲覧部参考室長 | 整理閲覧部助教授 |
| 〃 | 阿部泰郎 | 文献資料部助教授（7.9.30まで） | 名古屋大学文学部助教授 |
| 〃 | 中川博夫 | 研究情報部助教授（8.3.31まで） | 徳島大学総合科学部助教授 |
| 〃 | 二宮修治 | 史料館助教授（8.3.31まで） | 東京学芸大学教育学部助教授 |
| 7．7．1 | 丸山勝巳 | 研究情報部情報メディア室長 | 研究情報部教授 |
| | | （併任解除） | |
| 7．7．1 | 立川美彦 | 研究情報部情報メディア室長 | 研究情報部教授 |

## 【事務系職員】

| 発令年月日 | 氏名 | 異動内容（新官職） | 旧（現）官職等 |
|---|---|---|---|
| 7．4．1 | 野澤稔 | 情報サービス室長 | 富山医科薬科大学図書課長 |
| 〃 | 関口照子 | 庶務課事業係長 | 東京大学庶務部庶務課広報掛主任 |
| 〃 | 堀井英夫 | 会計課情報処理係長 | 東京大学大型計算機センター情報管理掛 |
| 〃 | 村山敏規 | 庶務課人事係人事主任 | 東京学芸大学教育学部（第二部）学務係 |
| 〃 | 天野和子 | 会計課用度係 | 東京大学物性研究所経理課経理掛 |
| 〃 | 石田さよ | 庶務課共同利用係（採用） | |
| 〃 | 添田勉 | 会計課経理係長 | 会計課用度係長 |
| 〃 | 三浦孝樹 | 会計課用度係長 | 会計課経理係長 |
| 〃 | 新藤正夫 | 会計課総務係総務主任 | 会計課用度係用度主任 |
| 〃 | 大久保武史 | 会計課経理係 | 会計課総務係 |
| 〃 | 岩崎光二 | 会計課情報処理係 | 会計課経理係 |
| 〃 | 増井ゆう子 | 情報サービス室情報管理係 | 情報サービス室情報サービス係 |
| 〃 | 伊藤雅子 | 情報サービス室情報サービス係 | 情報サービス室情報管理係 |
| 〃 | 金原貴洋 | 東京大学教養学部・数理科学研究図書課長 | 情報サービス室長 |
| 〃 | 中村秀子 | 東京大学先端科学技術研究センター研究協力掛長 | 庶務課事業係長 |
| 〃 | 前田哲男 | 東京大学医科学研究所経理課用度掛長 | 会計課情報処理係長 |
| 〃 | 椎名則之 | 東京学芸大学学生部教務課現職教育係長 | 庶務課人事係人事主任 |
| 〃 | 江畑あおい | 東京学芸大学教育学部附属高等学校 | 庶務課共同利用係 |
| 〃 | 清野一男 | 東京大学経理部情報処理課 | 会計課情報処理係 |
| 7．5．16 | 柳澤武 | 信州大学医学部管理課施設係長 | 会計課管財係管財主任 |

## 平成7年度

# 秋季学会

①事務局　②学会開催日　③会場

**解釈学会**　①〒170豊島区北大塚3-29-2　教育出版センター内03-5394-1203　②8月25・26日　③湯島聖堂斯文会館

**歌舞伎学会**　①〒169新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218　②11月25・26日　③淑徳短期大学

**訓点語学会**　①〒192-03八王子市東中野742-1　中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789　②10月20日　③新潟大学

**計量国語学会**　①〒167杉並区善福寺2　東京女子大学3号館118号室内03-3395-1211内339　②9月16日　③東京工業大学

**国語学会**　①〒113文京区本郷7-3-1　東京大学文学部国語研究室内03-3812-2111　事務取扱　①〒101千代田区神田錦町3-11武蔵野書院03-3291-4859　②10月21・22日　③新潟大学

**昭和文学会**　①〒101千代田区猿楽町2-2-5　笠間書院内03-3295-1331　②11月11日　③國學院大学

**説話・伝承学会**　①〒603京都市北区等持院北町56-1　立命館大学文学部福田晃研究室075-465-1111　②11月11～13日　③和歌山県熊野郡本宮町本宮山村開発センター

**全国大学国語教育学会**　①〒305つくば市天王台1-1-1　筑波大学教育学系人文科教育学研究室内0298-53-6732・6733　②11月3・4日　③静岡大学

**全国大学国語国文学会**　①〒101千代田区猿楽町2-2-6畑山第1ビル　㈱おうふう気付03-3294-0857　②10月6・7日　③梅光女学院大学

**中古文学会**　①〒112文京区白山5-28-20　東洋大学文学部国文学研究室03-3945-7367　②10月14・15日　③長野県勤労者福祉センター

**中世文学会**　①〒175板橋区高島平1-9-1　大東文化大学文学部日本文学科関口研究室03-3935-1113内3127　②11月3～5日　③久留米大学

**日本演劇学会**　①〒169新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218　②10月28日　③大阪芸術大学

**日本音声学会**　①〒101千代田区猿楽町1-3-1　03-3292-1718　②9月30日・10月1日　③明海大学

**日本歌謡学会**　①〒630奈良市高畑町奈良教育大学真鍋研究室内0742-27-9153　②9月30日・10月1日　③島根大学

**日本近世文学会**　①〒162新宿区戸山1-24-1　早稲田大学文学部谷脇理史研究室内03-3203-4141　②11月4・5日　③ノートルダム清心女子大学

**日本近代文学会**　①〒113文京区本郷7-3-1　東京大学文学部国文学研究室内03-3812-2111内3818　事務取扱①〒113文京区本駒込5-16-9学会センターC21日本学会事務センター内03-5814-5810　②10月28・29日　③愛媛大学

**日本国語教育学会**　①〒112文京区大塚3-29-1　日本教育研究連合会第3研究室内03-3941-3420　②10月13・14日　③愛知県半田市福祉文化会館

**社団法人　日本語教育学会**　①〒107港区赤坂1-8-10　第9興和ビル内03-3584-4872～3　②10月7・8日　③福岡大学

**日本児童文学学会**　①〒263千葉市稲毛区弥生町1-33　千葉大学教育学部国語科　佐藤宗子研究室気付043-290-2538　②11月11～13日　③日本女子大学

**日本社会文学会**　①〒101千代田区三崎町2-3-1、日本大学法学部　寒河江・栗栖研究室03-5275-8764　②11月25～27日　③未定

**日本文学協会**　①〒170豊島区南大塚2-17-10　03-3941-2740　②11月11・12日　③成城大学

**日本文学風土学会**　①〒359所沢市泉町1789　秋草学園短期大学国文科研究室　0429-25-1111　②11月11日　③専修大学

**日本文体論学会**　①〒110台東区下谷1-5-34　三修社内03-3842-1711　②12月1・2日　③英知大学

**日本方言研究会**　①〒192-03八王子市南大沢1-1　東京都立大学国語研究室内　日本方言研究会幹事0426-77-2135　①〒115北区西ヶ丘3-9-14　国立国語研究所気付日本方言研究会幹事03-3900-3111　②10月20日　③新潟大学

**俳文学会**　①〒192-03八王子市大塚359　帝京大学文学部内0426-78-3332　②10月7～9日　③山形県新庄市新庄市民プラザ

**萬葉学会**　①〒558大阪市住吉区杉本3-3-138　大阪市立大学文学部国語国文学研究室内06-605-2413・2414　②10月14～17日　③関西大学

**紫式部学会**　①〒230横浜市鶴見区鶴見2-1-3　鶴見大学文学部日本文学研究室内045-581-1001内242　②未定　③学習院大学

**和歌文学会**　①〒112文京区目白台2-8-1　日本女子大学日本文学研究室03-3943-3131内7300　②10月21～23日　③熊本大学

**和漢比較文学会**　①〒657神戸市灘区六甲台町1-1　神戸大学文学部合同研究室内078-803-0481　②11月25・26日　③神戸大学

国文学研究資料館報　第四十五号
平成七年九月発行
編集・発行者　国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話（三七八五）七一三一
FAX（三七八五）七〇五一
印刷所　有限会社　スミダ